

使用電力や販売情報収集

携帯電話や関連のモバイル機器は、今や至るところに設置されている。政府は家庭用の電力メーターをスマートメーターにすることを急いでいるが、これで電力の利用状況を逐次情報として取ることができるようになった。メーターのチェックにわざわざ人が行かなくても、電力使用状況は自動的に電力会社が集まる。また、スマートメーターを家庭の冷暖房や照明などと連動させることで、電力を節約することも可能になる。

街のあちこちにある自動販売機にもモバイル機器がついているも

伊藤 元重 機構教授 大東 隆 研究員 長 合 理事

が増えている。担当者がいちいち中を開けて見なくても、自販機の中に飲料がどれほど残っているのか、そしていつごろ追加の飲料をもっていきたらよいか、機械からの指示が来る。

最近の自動販売機には、携帯電話に付いているようなカメラが付いているものもある。自販機の

例えば、ある果汁飲料は平日の午後によく売れるが、調べてみるとそれを購入しているのは疲れた顔をした中年の男性であることが多かったという。こうした情報はメーカーの販売戦略に活用できる。

カメラは、誰がどのような商品を購入したのか、情報を蓄積している。プライバシーの問題がある

国民の生活を豊かにし、産業の活力を高めることができることを期待したい。特に過疎化で労働力が減少している農村地域などでは、モバイル機器の利用はぜひとも進めなくてはならない。

モバイル機器の利用促進を

NTTドコモが大部分のメーカーと一緒に進めている「牛温恵」という機器の事例は非常に面白い。

牛を飼っている牧場の労働力不足を補い、かつ子牛の出産に伴う事故を大幅に減らすことができるという。

牛出産に導入、負荷軽減

これまで、牧場で子牛を産む場合、10%程度の事故のリスクがあったそう。事故とは子牛が死産や流産したり、場合によっては親牛も影響を受けるといったことだろう。結構な事故の確率である。そうしたことを防ぐため、牧場で働く人は出産を控えた母牛に異変が起きていないか注意している必要がある。

ただ、困ったことに、母牛の出産のタイミングは3週間程度前後することがあるそう。思ったより早く生まれることもあれば、出産が遅れるケースもある。3週間

の間、日夜母牛の状況を監視することは大変だ。

牛温恵は母牛の体内に体温計みたいなものを差し込む装置だ。それで母牛の体温の変化を細かく計測する。出産の直前には体温が少しずつ下がるそうだが、そうした変化を察知すれば牛温恵が飼主の携帯に「出産が間近である」とメールで知らせる仕組みである。これで実際の出産の1日前くらいに連絡が来るようになったという。

この機器を導入してすでに3万頭ぐらゐの子牛が生まれたそう。そして事故率は0.5%以下にまで下がったという。大変な事故率低下である。そしてもちろん、牧場で働く人もずっと牛を監視する必要がなくなり、仕事の負荷はだいぶ軽減されたという。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。